

平成20年度

高知南国道路外埋蔵文化財発掘調査業務委託

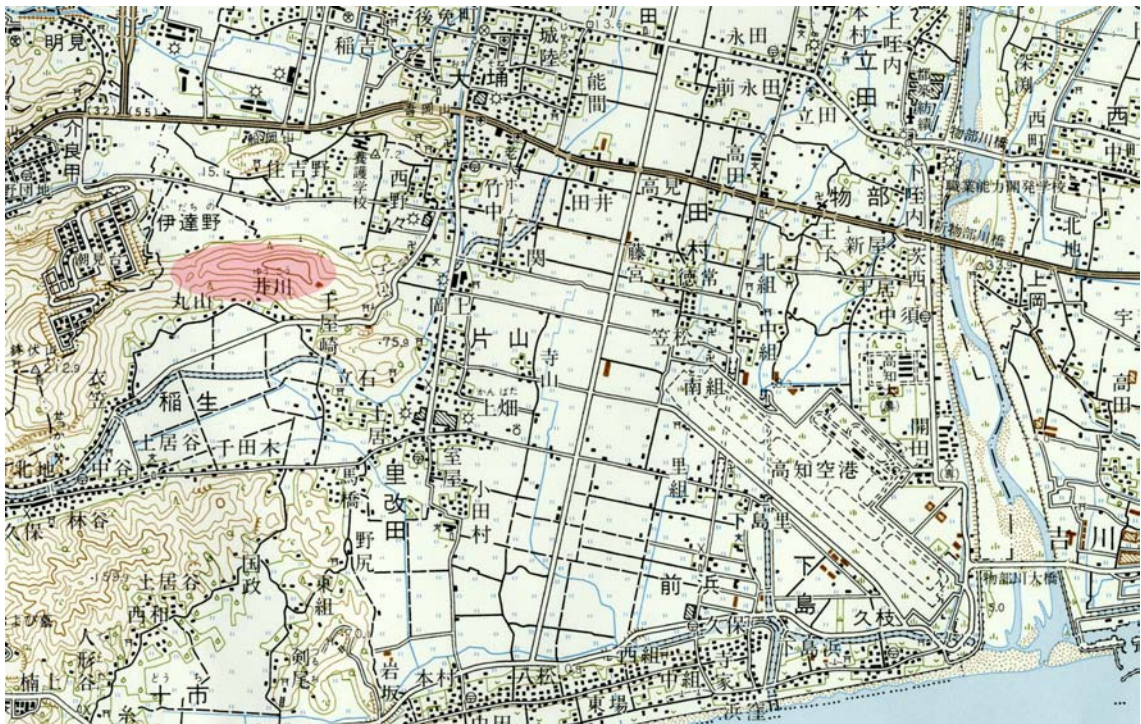
向山戦争遺跡

記者発表及び現地説明会資料



日時	記者発表	2008年12月5日(金) 10:00～12:00
	現地説明会	2008年12月7日(日) 13:30～15:30

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



向山戦争遺跡位置図(S=1/50000)

1. 調査の目的

今回の発掘調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画している一般国道55号高知南国道路工事区域内に所在している向山戦争遺跡について、事前の発掘調査を実施して遺跡の内容を記録し、地域の歴史復元に役立てようとするものです。

2. 調査対象地(調査面積)

南国市伊達野字溝淵689-3外 (約4,000㎡)

3. 向山戦争遺跡の概要

向山戦争遺跡は、南国市の伊達野と稲生の間を東西に延びる通称向山と呼ばれている山塊の尾根や斜面部に広がっています。高知平野には、太平洋戦争末期の「本土決戦」陣地が多数作られました。その一郭を占めています。残存遺構は、尾根(65m)にある陣地と交通壕、山腹を貫通する坑道、北斜面に掘られた大小の陣地や保管庫と考えられる壕などから構成されています。

4. 調査体制

調査委託者	国土交通省 四国地方整備局
調査主体	高知県教育委員会
調査実施機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

5. 調査期間

平成20年9月1日～12月15日(予定)

6. 調査方法

残存遺構周辺の樹木の伐採や倒木などを片付け、現存状態を写真撮影しました。その後各遺構を全て手掘りで掘削し、測量図面と写真で記録に留めました。



7. 調査結果

(1) 検出遺構

坑道1本(延長110m)、交通壕7本、陣地遺構13基、各種壕20基

(2) 出土遺物

武器類：小銃弾薬莢(やっきょう)、工具類：鍬(かすがい)、金槌、釘、チス他

8. 調査結果

(1) 1号遺構群

尾根部を中心に大小10基の陣地が構築され各遺構は北側斜面に掘りめぐらされた交通壕で結ばれています。円形や長方形に岩盤を垂直に掘削しています。交通壕や1-6号の周辺からカスガイが出土していることから内部に板を張っていたことも考えられます。これらの遺構に、具体的にどんな武器が置かれようとしていたのか、現時点では明らかにすることができませんが、昨年上ノ村遺跡で明らかになった小銃掩体に比べて規模が大きく形も異なります。

(2) 2号遺構群

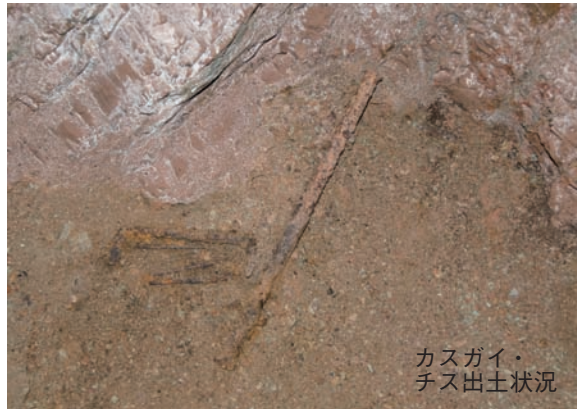
山腹を貫通する坑道(2-1号)とそれに関連すると考えられる四角い掘り込み(2-2・3号)から構成されています。坑道は北から南に貫通するものと、中程でそれに取り付くコ字状に掘られた坑道からなっています。前者は幅1.8m、高さ2m、延長72m、後者は幅が2.6mとかなり広がっています。後者は居住区として利用された可能性もあります。床面には90cm間隔で枕木が置かれ、壁には坑木痕跡が残っています。崩落土を除けながら掘り進んでいきましたが、中程の大崩落土を除けることはできませんでした。枕木坑からはカスガイ、釘、金槌などが出土しています。当時を知る方の証言によれば、天井、壁、床は板材を張っていたということです。また壁の岩盤にはツルハシの痕が随所に見られます。南側開口部は枡形に掘られていますが、砲床と考えられます。



22号遺構



1-7号遺構



カスガイ・
チス出土状況



薬莖出土状況

(3)北斜面の遺構群

最も多くの遺構が認められますが、その形状から細長く掘られた壕と平面が円形に近くて深く掘られ周囲に掩体を持つ遺構からなっています。前者は保管庫、後者は上陸してくる「敵」に対して山越えに撃つための砲兵陣地であったと考えられます。43点の小銃弾薬莖は保管庫と考えられる15号遺構から出土しています。

9.「本土決戦」準備下の香長平野

太平洋戦争末期、「本土決戦」が現実的になりはじめた1945年春以降、高知でも米軍の上陸に備える準備が進められるようになります。沖縄での地上戦闘が開始された4月には、四国防衛の部隊として第55軍(偕部隊 司令部は香美市新改)が編成され、隷下の3個師団(11・155・205師団)を中心に約12万人の兵力が配備されますが、その大半が高知平野に展開していました。海岸部には特攻基地が作られ、平野部や近隣の山塊には「敵」を迎え撃つための陣地が数多く構築されました。当時、大本営が作成した資料によると、1kmあたりの戦力密度は「高知正面」が最大の数値を示しており、高知平野が如何に重視されていたのか知ることができます。

向山戦争遺跡の周辺は、片山、金比羅山、船岡山など各種陣地の集中地点となっていますが、これらの陣地は、素掘りのものが多くコンクリートで固めた例は少数です。強力な艦砲射撃や爆撃に対してはほとんど持ちこたえることはできなかったのではないかと思います。それでも陣地を作り続けなければならなかった戦争とは一体何だったのでしょうか。当時、兵隊は壕や急ごしらえの兵舎、民家の納屋などで寝起きしていました。住民と軍隊が同居していたのです。戦後63年、戦争の記憶は次第に消え去ろうとしています。そのような中であって戦争遺跡は、戦争の実相と悲惨、愚かさを私たちに語りかけてくれる資料として意義深いものがあると思います。